

〈論文〉

## 高校における友人及び教師との関係と

### 学校への適応感の関連

—学校や教師に対する生徒の態度による学校タイプに注目して—

渡邊仁\* 加藤弘通†

School Adjustment and Relationships with Friends and Teachers

in High School

Focus on School Types and Student Attitudes towards Schools and Teachers

Jin WATANABE\* Hiromichi KATOU†

#### 要旨

学校や教師に対する生徒の態度によって学校タイプを分類し、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を検討した結果、どの学校タイプも友人との関係と学校生活全体・行事の楽しさの関連は強かった。一方、教師との関係と授業の楽しさの関連の強さは学校タイプ毎に異なっていた。このことから、従来の高校における学校適応研究に不足していた、学校タイプを考慮した新たな知見を示唆した。

#### Abstract

Focusing on students' attitudes toward schools and teachers, we examined the relationship between school adjustment and relationships with friends and teachers. In all schools we examined, there was a strong connection between relationships with friends and enjoyment of school life and events. On the other hand, the relationship between the relationship with the teacher and the enjoyment of the lesson was different for each school type. These results suggest it is necessary to understand what kind of requests schools and teachers are making of their students.

#### キーワード

学校適応 (school adjustment) 教師との関係 (relationship with teacher(s)) 学校への従順性 (obedience to school) 学校の雰囲気 (school atmosphere)

---

\* 北海道情報大学経営情報学部システム情報学科講師, Senior Lecturer, Department of Business and Information Systems, HIU

† 北海道大学大学院教育学院准教授, Associate Professor, Department of Education, Hokkaido University

## 1. 問題

### 1-1 高校における友人及び教師との関係

文部科学省（2020）によると、高校の中途退学の主な理由として、進路変更と学校生活・学業不適応がある。進路変更の中には学校生活・学業不適応となった結果、進路変更となった生徒が含まれることから（藤原・河村 2014a）、中途退学する生徒の多くが学校適応に問題を抱えていたと言える。また、学校生活・学業不適応の主な内容の一つに対人関係があり（文部科学省 2020）、友人や教師との関係の不調が中途退学に繋がると考えられる。さらに、高校における学校適応研究においても、友人や教師との関係が学校適応の関連要因であることが明らかにされている（藤原・河村 2014a; 藤原・河村 2017; 大久保 2005; 富永 2014）。中途退学は、生徒にとって低賃金労働や非正規雇用といった将来の不利益となる可能性があることから（古賀 2015）、学校適応の関連要因である友人や教師との良好な関係が重要であると言える。

### 1-2 学校適応を捉える観点

これまで、学校適応に関する研究が多くなされてきたが、学校適応を友人や教師との関係から捉えたり、学校の楽しさから捉えたりと研究によって様々な観点から捉えられていた（石田 2009）。それに対し、渡邊（2020）は学校適応を捉える観点を整理し、友人や教師との関係といった個人と環境の関係の観点から捉えた学校適応が要因となり、学校の楽しさといった主観的な認知・評価・感情の観点から捉えた学校適応が決まるということを示唆している。特に高校は学校によって様々な特徴があり（藤原・河村 2014b）、学校適応の様相も学校によって異なる（Fenzel & Blyth 1986）。例えば、学校や教師の価値や規範から

逸脱する反学校的な雰囲気がある学校では（福岡 2001）、教師との良好な関係は必ずしも学校適応に繋がらない（大久保 2005）。そのため、個人と環境の関係の観点から学校適応を捉えると、教師との関係が良好な生徒が学校に適応しているという結果に矛盾が生じる。したがって、高校においては、学校に対する主観的な認知・評価・感情の観点から学校適応を捉える必要があると考えられる（渡邊 2020）。以上を踏まえ、本研究では学校に対する主観的な認知・評価・感情の観点（以下、学校への適応感）から学校適応を捉え、学校への適応感の関連要因を検討することとする。具体的には、学校への適応感の関連要因として、友人及び教師との関係に焦点をあて、学校への適応感との関連の在り方が学校によって違いがあるのかを検討する。

### 1-3 友人及び教師との関係と学校への適応感の関連

高校における友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を検討した研究はいくつかあり（藤原・河村 2017; 中本・森ほか 2007; 富永 2014）、多くの学校で友人との関係と学校への適応感に関連があることが明らかにされている（藤原・河村 2014a; 大久保 2005; 大対 2011）。一方で、教師との関係と学校への適応感の関連は各学校の大学進学率や学校個々に異なることが明らかにされている。例えば、藤原・河村（2014a）が各学校の大学進学率によって学校を分類して検討した結果、大学進学率毎に教師との関係と学校への適応感の関連の強さは異なると指摘している。しかし、大久保（2005）は学校個々に学校への適応感の関連要因を検討した結果、学校個々に教師との関係と学校への適応感の関連の強さは異なり、大学進学率が同様の学校間においても異なる結果を明らかにしている。近年、高校卒業生全体の大学進学率が 50%を超

え（文部科学省 2021）、生徒の学歴意識は低下し、学校へ適応する様相において、大学進学率等の学力的な高校の特徴が見えなくなっている（知念 2019；秦・片山ほか 2004；樋田・耳塚ほか 2000；尾嶋 2001）。よって、単純に大学進学率毎に教師との関係と学校への適応感の関連の強さが異なるとは言えない可能性が考えられる。以上のことから、教師との関係と学校への適応感の関連の強さがなぜ学校によって異なるのかという点については、先行研究からはまだ十分に明らかになっているとは言えない。

それでは教師との関係と学校への適応感の関連の強さが学校によって異なるのはなぜだろうか。それは、前述したように、学校や教師の価値や規範から逸脱する反学校的な雰囲気がある学校では（福岡 2001）、教師との良好な関係は必ずしも学校適応に繋がらないことから（大久保 2005）、学校や教師に対する生徒の態度が一因だと考えられる。具体的には、学校の規則や教師の指導に従わないような学校への従順性が低い生徒が多い学校では、生徒と教師との関係が良好ではなく、教師との関係と学校への適応感の関連は弱いまたは関連がないことが予想される。

加えて、前述したように、多くの学校で友人との関係と学校への適応感に関連があることが明らかにされてきたが、学校の雰囲気、つまり生徒の学校への従順性の高さで、その関連の強さが異なるかどうかは明らかにされていない。例えば、渡邊（2018）が、反学校的な雰囲気がある学校では、問題行動をしていない生徒の認識として、問題行動をしていない生徒のことを肯定的に捉え、逆に教師の指導のことを否定的に捉えていると指摘している。そのため、学校への従順性が低い生徒が多い学校では、教師のことを敵視することで、生徒同士の結びつきが強くなることが考

えられ、友人との関係と学校への適応感の関連がより強い可能性が予想される。

以上を踏まえ、高校における学校への適応感の関連要因を検討するためには、各学校の生徒が、学校や教師に対して、どのような態度を有しているのかを考慮した上で、友人や教師との関係と学校への適応感の関連を検討する必要があると考えられる。

#### 1-4 学校への適応感の測定

なお、学校への適応感の測定に関しては、様々な側面から検討がなされてきた。例えば、永作・新井（2005）は学校での対人関係に満足している生徒は、学校生活を楽しんでいることを明らかにしている。また、森田・平川ほか（2016）は、学校での対人関係と関連がある学校での居場所の有無と「学校では楽しいことがたくさんある」等の質問項目からなる学校生活享受感尺度（古市・玉木 1994）の間に関連があることを指摘している。つまり、生徒の学校への適応感にとって、学校での楽しさが重要であると言える。

また、生徒の学校生活を構成する高校の教育課程には（文部科学省 2018）、主に各教科や総合的な探求の時間といった授業と学校行事といった特別活動がある。また、教育課程外の活動については、登下校、休み時間、部活動等多岐に渡っている。そのため、学校の楽しさと言っても、授業が楽しい、行事が楽しい、その他学校生活が全体的に楽しいといったように、個々の場面や全体の印象によって異なることが考えられる（図 1）。

以上を踏まえ、本研究では、友人及び教師との関係と学校の楽しさの関連をより具体的な場面において検討するために、「学校生活全体の楽しさ」「授業の楽しさ」「行事の楽しさ」において、学校への適応感を測定する。

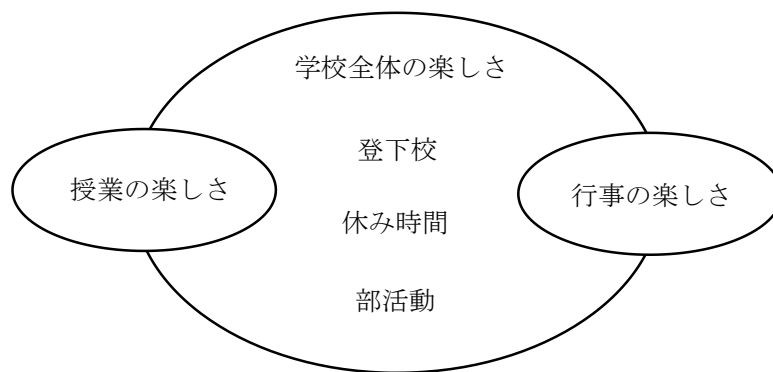


図1 学校の楽しさの構成

## 2. 目的

本研究では、各学校における学校や教師に対する生徒の態度に注目し、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を明らかにすることを目的とする。具体的には、まず各学校における学校や教師に対する生徒の態度である「学校への従順性」を明らかにし、各学校の平均値によって学校タイプを分類する。次に、分類した学校タイプにおける対人関係の特徴を明らかにするために、友人及び教師との関係の平均値を比較する。そして、分類した学校タイプ毎に、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を検討する。

また以前から、学校適応の様相は学校毎に異なるため (Fenzel & Blyth 1986) , 学校の様々な特徴を把握した上で学校別に分析を行う必要があると指摘されてきた (藤原・河村 2014b; 大久保 2005)。しかし、具体的にどのような学校の特徴を把握すれば良いのかは明らかにされてこなかった。したがって、本研究では、生徒の「学校への従順性」に注目することで、学校タイプを分類し、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を明らかにする。それによって、従来の高校における学校適応研究に不足していた、学校タイプを考慮した新たな知見を示唆できると考えられる。

## 3. 方法

### 3-1 対象者

全日制課程の公立高校 6 校に在籍する生徒を対象に調査を実施し、計 1123 名から有効回答を得た (表 1)。なお性別については、A 商業は男 34 名・女 75 名・性別回答なし 7 名、B 工業は男 45 名・女 17 名・性別回答なし 6 名、C 普通は男 55 名・女 90 名・性別回答なし 7 名、D 農業は男 92 名・女 73 名・性別回答なし 11 名、E 工業は男 178 名・女 7 名・性別回答なし 9 名、F 普通は男 224 名・女 184 名・性別回答なし 9 名である。各校の特徴として、A 商業は商業科のみを有する商業高校で、全校生徒 700 名程度の規模の学校である。B 工業は工業科のみを有する工業高校で、全校生徒 700 名程度の規模の学校である。C 普通は普通科と国際教養科を有する普通高校で、全校生徒 850 名程度の規模の学校である。D 農業は農業科のみを有する農業高校で、全校生徒 200 名程度の規模の学校である。E 工業は工業科のみを有する工業高校で、全校生徒 540 名程度の規模の学校である。F 普通は普通科のみを有する普通高校で、全校生徒 700 名程度の規模の学校である。各学校における大学進学率については、先行研究 (藤原・河村 2014a; 河村・藤原 2010; 大久保 2005) を参考に、大学進学率

表1 調査対象校

	種類	大学 進学率	進学率分類	1年生	2年生	3年生	計
A 商業	商業高校	25%	進路多様校	39	38	39	116
B 工業	工業高校	25%	進路多様校	35		33	68
C 普通	普通高校	77%	進路多様校	152			152
D 農業	農業高校	5%	非進学校	59	61	56	176
E 工業	工業高校	29%	進路多様校	194			194
F 普通	普通高校	98%	進学校	213	204		417
			計	692	303	128	1123

20%以下を非進学校、20%を超えて80%未満の学校を進路多様校、80%以上を進学校と分類した。

### 3-2 調査内容

質問紙は表紙を含むA3用紙裏表印刷1枚で構成されたものである。なお表紙には、本研究の代表者の所属と氏名、研究の目的、質問への答え方を例示し、学年を答える空欄を設けた。また、「あなたの学校のことについてお聞きします。下に書いていることについて、あてはまるところに○をつけてください。」と教示文を記述した。調査内容は以下の通りである。なお、回答形式は全て「あてはまらない」(1点)～「あてはまる」(5点)までの5件法である。

#### 3-2-1 学校や教師に対する生徒の態度

学校や教師に対する生徒の態度の評価には、学校への従順性として「学校の規則や先生の言うことには従う」の1項目を使用した。なお、事前に高校教師4名に質問項目を検討してもらい、学校や教師に対する生徒の態度を測定する尺度として妥当であることを確認した。

#### 3-2-2 友人及び教師との関係

友人及び教師との関係の評価には、大久保・青柳(2004)の中高生用学校生活尺度の友人との関係因子を参考に、「学校には仲の良い友人がたくさんいる」「友だちといると楽しい」の2項目と、教師との関係因子を参考に「先生は生徒の気持ちをわかってくれる」「先生は話を聞いてくれる」「先生は困った時に相談できる」の3項目を使用した。

い友人がたくさんいる」「友だちといると楽しい」の2項目と、教師との関係因子を参考に「先生は生徒の気持ちをわかってくれる」「先生は話を聞いてくれる」「先生は困った時に相談できる」の3項目を使用した。

#### 3-2-3 学校への適応感

学校への適応感の評価には、古市・玉木(1994)の学校享受感尺度を参考に、「学校生活は楽しい」「学校の授業は楽しい」「学校の行事は楽しい」の3項目を使用した。

### 3-3 手続き及び倫理的配慮

調査は、全ての学校で2018年10月から2019年1月にかけて行った。各学校の学校長の許可を得て、各学校の実情に応じて協力が得られた学級の担任を通して質問紙への回答を依頼し、無記名で実施した。あらかじめ生徒に対して、調査への回答は任意であり、回答しないことによる不利益は生じないこと、データ入力後は質問紙を破棄することを説明文書と学級担任の口頭説明によって教示し、倫理的配慮を行った。全ての分析はPASW Statistics 18.0 (SPSS)を使用した。

## 4. 結果

### 4-1 学校や教師に対する生徒の態度による

## 学校タイプの分類

本研究は、各学校における学校や教師に対する生徒の態度に注目して、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を明らかにすることが目的である。よって、まずは各学校における学校や教師に対する生徒の態度によって、学校タイプを分類するため、「学校への従順性」について、1要因分散分析を行った（表2）。また、「学校への従順性」得点において、6群間に0.1%水準で有意差が認められたので（ $F(5, 1118) = 8.10, p < .001$ ）、Tukey法の多重比較を行った。その結果、「学校への従順性」得点において、C普通・A商業・E工業はD農業・B工業よりも有意に高く、F普通はD農業よりも有意に高かった。

以上の結果から、学校への従順性が低い学校タイプはD農業・B工業、学校への従順性が高い学校タイプはF普通・C普通・A商業・E工業であった。なお、F普通はB工業よりも有意に高いわけではなかったが、C普通・A商業・E工業と同様にD農業よりも有意に高いことと、B工業とD農業の値にほとんど差がなかったことから、F普通はC普通・A商業・E工業と同じ学校タイプの分類に加

えた。

## 4-2 分類した学校タイプにおける対人関係の特徴

次に、学校への従順性によって分類した学校タイプにおける対人関係の特徴を明らかにするために、友人及び教師との関係の平均値を比較する。そのため、「友人との関係」と「教師との関係」について、それぞれ1要因分散分析を行った（表3~4）。また、「教師との関係」得点において、6群間に5%水準で有意差が認められたので（ $F(5, 1106) = 2.46, p < .05$ ）、Tukey法の多重比較を行った。その結果、「教師との関係」得点において、F普通はD農業よりも有意に高かった。なお、「友人との関係」得点は、学校間において有意差はなかった（ $F(5, 1112) = 1.18, n.s.$ ）。

以上の結果から、分類した学校タイプに関わらず、友人との関係の良好さに学校間で有意な差はなかった。また、教師との関係の良好さについてはF普通とD農業の間に有意な差があったが、特に分類した学校タイプの特徴は表れなかった。

表2 学校別における学校への従順性の平均値と分散分析結果

	A 商業	B 工業	C 普通	D 農業	E 工業	F 普通	F 値
学校への従順性	4.23 (0.77)	3.85 (0.88)	4.20 (0.76)	3.82 (0.89)	4.24 (0.72)	4.12 (0.79)	8.10***
カッコ内は標準偏差							* $p < .05$ , ** $p < .01$ , *** $p < .001$
多重比較							
D 農業・B 工業 < C 普通・A 商業・E 工業							
D 農業 < F 普通							

表3 学校別における友人との関係の平均値と分散分析結果

	D 農業	B 工業	F 普通	C 普通	A 商業	E 工業	F 値
友人との関係	3.94 (0.89)	3.98 (0.81)	4.05 (0.81)	4.07 (0.71)	4.12 (0.72)	3.97 (0.80)	1.18
カッコ内は標準偏差							* $p < .05$ , ** $p < .01$ , *** $p < .001$

表4 学校別における教師との関係の平均値と分散分析結果

	D 農業	B 工業	F 普通	C 普通	A 商業	E 工業	F 値
教師との 関係	3.31 (0.82)	3.42 (0.99)	3.56 (0.84)	3.56 (0.87)	3.46 (0.85)	3.53 (0.78)	2.46*
カッコ内は標準偏差						* $p<.05$ , ** $p<.01$ , *** $p<.001$	
						多重比較	
						D 農業<F 普通	

#### 4-3 学校タイプ毎の友人及び教師との関係と学校への適応感の関連

次に、学校への従順性によって分類した学校タイプ毎に、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を明らかにするために、学

校への適応感の下位尺度得点を従属変数、「友人との関係」と「教師との関係」を独立変数として、強制投入法による重回帰分析を行った（表5～7）。

表5 友人及び教師との関係と学校生活全体の楽しさの関連

	D 農業	B 工業	F 普通	C 普通	A 商業	E 工業	
友人との関係 ( $\beta$ )	.52***	.59***	.57***	.55***	.63***	.62***	
教師との関係 ( $\beta$ )	.12	.05	.23***	.21**	.07	.13*	
F 値	39.58***	18.90***	169.20***	48.95***	41.65***	70.10***	
決定係数 ( $R^2$ )	.31***	.35***	.45***	.39***	.43***	.43***	
$\beta$ は標準偏回帰係数						* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$	

表6 友人及び教師との関係と授業の楽しさの関連

	D 農業	B 工業	F 普通	C 普通	A 商業	E 工業	
友人との関係 ( $\beta$ )	.19*	.22	.19***	.19*	.07	.13	
教師との関係 ( $\beta$ )	.23**	.20	.31***	.35***	.38***	.41***	
F 値	10.36***	4.66*	41.29***	16.72***	10.95***	23.39***	
決定係数 ( $R^2$ )	.10***	.10*	.16***	.18***	.15***	.19***	
$\beta$ は標準偏回帰係数						* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$	

表7 友人及び教師との関係と行事の楽しさの関連

	D 農業	B 工業	F 普通	C 普通	A 商業	E 工業	
友人との関係 ( $\beta$ )	.45***	.43***	.51***	.49***	.57***	.40***	
教師との関係 ( $\beta$ )	.15*	.25*	.03	.11	-.02	.11	
F 値	28.67***	16.21***	74.29***	28.31***	25.47***	21.26***	
決定係数 ( $R^2$ )	.25***	.32***	.26***	.27***	.30***	.18***	
$\beta$ は標準偏回帰係数						* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$	

#### 4-3-1 学校への従順性が低い学校タイプ (D 農業・B 工業)

学校生活全体の楽しさにおいて、D 農業・B 工業とも共通して友人との関係の関連が強く、教師との関係の関連はなかった。また、授業の楽しさにおいて、D 農業は友人及び教師との関係のどちらも弱い関連があったが、B 工業は関連がなかった。さらに、行事の楽しさにおいて、D 農業・B 工業とも共通して友人との関係の関連が強く、教師との関係の関連は弱かった。

以上のことから、予想していた通り、D 農業・B 工業とも友人との関係と学校生活全体・行事の楽しさの関連は強かった。ただし、友人との関係と授業の楽しさの関連はほとんどなかった。また、概ね予想していた通り、D 農業・B 工業とも、教師との関係と学校生活全体・授業・行事の楽しさの関連は弱かった。

#### 4-3-2 学校への従順性が高い学校タイプ (F 普通・C 普通・A 商業・E 工業)

学校生活全体の楽しさにおいて、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業とも共通して友人との関係の関連が強く、教師との関係は F 普通・C 普通・E 工業において弱い関連があり、A 商業は関連がなかった。また、授業の楽しさにおいて、F 普通・C 普通は友人との関係の関連が弱く、A 商業・E 工業は関連がなかった。加えて授業の楽しさにおいて、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業とも共通して教師との関係は関連があった。さらに、行事の楽しさにおいて、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業とも共通して友人との関係の関連が強く、教師との関係は関連がなかった。

以上のことから、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業とも、友人との関係と学校生活全体・行事の楽しさの関連は強かった。ただし、友人との関係と授業の楽しさの関連はほとんどなかった。また、授業の楽しさにおい

ては予想通り、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業は、教師との関係の関連があったが、学校生活全体・行事の楽しさにおいては予想と反して、教師との関係の関連は弱いまたは関連がなかった。

## 5. 考察

本研究は、各学校における学校や教師に対する生徒の態度に注目して、友人及び教師との関係と学校への適応感の関連を明らかにすることが目的であった。はじめに、各学校における学校や教師に対する生徒の態度によって、学校タイプを分類した結果、D 農業・B 工業が学校への従順性が低い学校タイプ、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業が学校への従順性が高い学校タイプとなった。学校タイプの分類を見ると、A 商業と B 工業といったように大学進学率が同様の学校同士であっても、異なる学校タイプに分類された。また、B 工業と E 工業のように、同じ工業高校同士であっても、異なる学校タイプに分類された。したがって、学校や教師に対する生徒の態度は、大学進学率や専門学科によって異なるのではなく、個々の学校によって異なることが考えられる。近年、高校卒業生全体の大学進学率が 50%を超え（文部科学省 2021）、生徒の学歴意識は低下し、学校へ適応する様相において、大学進学率等の学力的な高校の特徴が見えなくなっていることから（知念 2019; 秦・片山ほか 2004; 樋田・耳塚ほか 2000; 尾嶋 2001）、本研究は妥当な結果であると考えられる。

また、反学校的な雰囲気がある学校において、問題行動をしていない生徒は、問題行動をしている生徒のことを肯定的に捉え、逆に教師の指導のことを否定的に捉えていると指摘されていることから（渡邊 2018）、学校への従順性が低い学校タイプでは、教師のこと



を敵視することで、生徒同士の結びつきが強くなることを予想していた。しかし、本研究では、学校タイプ毎に「友人との関係」と「教師との関係」得点の平均値を比較した結果、学校への従順性が低い学校タイプと高い学校タイプの間には有意な差はなかった。これは、他の学校に比べて学校への従順性が低い学校タイプの D 農業・B 工業であっても、「学校への従順性」得点は3を超えているので、どちらかという学校規則や教師の言うことには従う傾向にあったことから、教師との関係が悪いわけではなかったことが一因であると考えられる。

さらに、前述したように、学校への従順性が低い学校タイプでは、教師のことを敵視することで、生徒同士の結びつきが強くなり、友人との関係と学校への適応感の関連が強いことを予想していたが、友人との関係と学校生活全体・行事の楽しさの関連の強さにおいて、学校への従順性による学校タイプの特徴は表れなかった。先行研究でも多くの学校で友人との関係と学校への適応感の関連が強いと指摘されていることから（藤原・河村 2014a; 大久保 2005; 大対 2011）、学校への従順性による学校タイプに関わらず、生徒が学校生活や行事を楽しく過ごす上で、友人との関係は重要であると考えられる。ただし本研究では、全ての学校において、友人との関係と授業の楽しさの関連は弱いまたは関連がなく、決定係数の値も小さかった。これは、授業場面において、友人と関わる機会が少ないため、友人との関係が良好であるかどうかは重要ではなかったと考えられる。

そして、前述したように、学校への従順性が低い学校タイプでは、教師との関係と学校への適応感の関連は弱いことを予想していた通り、D 農業・B 工業では、教師との関係と学校生活全体・授業・行事の楽しさの関連は弱かった。このことから、学校への従順性が

低い学校タイプでは、教師との関係に価値が置かれていないことが考えられる。一方で、学校への従順性が高い学校タイプでは、生徒と教師の関係が良好であり、教師との関係と学校への適応感の関連は強いことを予想していた通り、F 普通・C 普通・A 商業・E 工業では、教師との関係と授業の楽しさの関連は比較的強かった。しかし、教師との関係と学校生活全体・行事の楽しさの関連は弱いまたは関連がなかった。一部、予想とは異なる結果となった一因として、学校や教師が求める、学校へ適応する生徒像が考えられる。例えば、教師が生徒に対して主体性を求める学校では、教師の言うことに従順であると、生徒が自らの力で学校生活や行事を楽しもうとするため、教師の関与が減り、教師との関係と学校への適応感の関連は弱くなることが考えられる。つまり、生徒の学校への従順性を把握するだけでなく、その学校や教師がどういったことを生徒に対して求めているのかを把握することも重要であると言える。

以上のことから、生徒の学校適応において、生徒の学校への従順性が高い学校の場合には特に、教師は注意が必要である。なぜなら、一点目として、生徒と教師の関係が良好であるかどうか、授業の楽しさにおいて重要だからである。二点目として、生徒は学校や教師に対して従順であることから、仮に学校や教師が求めていることが生徒の意向に沿っていなかったとしても、生徒は意向に反して従順にならざるを得ないことが考えられ、結果的に学校への適応感が低くなってしまう可能性があるからである。そのため、教育実践への示唆として、教育現場にいる教師は、自分や学校が生徒に対してどういったことを求めているのかということをも自覚するとともに、生徒とのミスマッチが起きていないかということをも改めて認識することが重要であると考えられる。

最後に今後の課題を述べる。これまで、学校や教師に対する生徒の態度に関する研究において(知念 2019; 秦・片山ほか 2004), 学年による違いは指摘されていない。しかし、本研究では、全ての調査校において1年生から3年生の全てを調査していないことから、今後は調査協力者を増やし、全校生徒の傾向や学年による違いも考慮して検討する必要があると考えられる。

## 参考文献

- 知念渉 (2019) 「生徒文化研究の発展に向けた予備的考察—『文化・階級・卓越化』を手がかりに」『中央大学大学院社会学研究科』社会学論集第 18 号, pp.5-26。
- Fenzel, L. M., Blyth, D. A. (1986) “Individual adjustment to school transitions: An exploration of the role of supportive peer relations” *The Journal of Early Adolescence*, Vol, 6, Mo.4, pp.315-329.
- 秦政春・片山悠樹・西田亜希子 (2004) 「現在高校生にとっての『高校』」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 30 号, pp.114-142。
- 藤原和政・河村茂雄 (2014a) 「高校生における学校適応とスクール・モラルとの関連—学校タイプの視点から」『カウンセリング研究』第 47 巻第 4 号, pp.196-203。
- 藤原和政・河村茂雄 (2014b) 「高等学校教育における学校不適応問題への対応の変遷」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第 21 巻第 2 号, pp.71-81。
- 藤原和政・河村茂雄 (2017) 「高校生における学校適応とスクール・モラルとの関連に基づく心理教育的援助の方向性の検討」『教育カウンセリング研究』第 8 巻第 1 号, pp.33-41。
- 福岡哲朗 (2001) 「専門高校における生徒文化の再考」『九州大学教育社会学研究集録』第 3 巻, pp.11-20。
- 古市裕一・玉木弘之 (1994) 「学校生活の楽しさとその規定要因」『岡山大学教育学部研究集録』第 96 巻, pp.105-113。
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦 (2000) 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 石田靖彦 (2009) 「学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 12 巻, pp.287-292。
- 古賀正義 (2015) 「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から」『教育社会学研究』第 96 巻, pp.47-67。
- 文部科学省 (2018) 「学習指導要領 (平成 30 年告示)」  
[https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_6\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf) (2022 年 7 月 18 日アクセス)。
- 文部科学省 (2020) 「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20211008-mext\\_jidou01-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211008-mext_jidou01-100002753_01.pdf) (2022 年 7 月 18 日アクセス)。
- 文部科学省 (2021) 「学校基本調査」。
- 森田真理恵・平川俊功・道上恵美子 (2016) 「高校生の精神健康度と「居場所」及び「居場所環境」との関連」『日本健康相談活動学会誌』第 11 巻第 1 号, pp.32-45。
- 永作稔・新井邦二郎 (2005) 「自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討」『教育心理学研究』第 53 巻第 4 号, pp.516-528。
- 中本浩揮・森司朗・屋良朝栄 (2007) 「高校生における教師に対する信頼感と学校適応感の関係」『鹿屋体育大学学術研究紀要』第 35 巻, pp.1-13。
- 尾嶋文明 (2001) 「現代高校生の計量社会学—

- 進路・生活・世代』『ミネルヴァ書房』。
- 大久保智生（2005）「青年の学校への適応感とその規定要因」『教育心理学研究』第 53 卷, pp.307-319。
- 大久保智生・青柳肇（2004）「中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『日本福祉教育専門学校研究紀要』第 12 卷, pp.9-15。
- 大対香奈子（2011）「高校生の学校適応と社会的スキルおよびソーシャルサポートとの関連—不登校生徒との比較」『近畿大学総合社会学部紀要』第 1 卷第 1 号, pp.23-33。
- 富永幹人（2014）「中学生・高校生の教師への信頼感と学校適応感」『福岡女学院大学大学院紀要』第 11 卷, pp.37-45。
- 渡邊仁（2018）「教師として考えつづけるための教育心理学」『ナカニシヤ出版』, pp.63。
- 渡邊仁（2020）「高校における学校適応研究の過去 10 年の動向と課題」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 137 卷, pp.1-30。